
三時間

木村よし

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三時間

【Nコード】

N5005D

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

私は死んだ。白い車に撥ねられて。だから、ねえ。イマ、アイニイカラ。

上（前書き）

これは、当たり前な日常を送っている私達に。

心から贈りたい物語。

上

上・

私は、どうやら死んだらしい。

『らしい』というのは、今自分の死体の前に浮いているのではなく、立っているからである。

現在、十月三日。午後六時二分。

約一分前、私、木村春香は、白い乗用車に跳ねられたのだ。

ふう、と小さなため息を一つした後、辺りをぐるりと見渡す。

山の中だった。

深く黒い闇が、沢山ある木々の一本一本に、しんと潜んでいるかのようなようである。

どうしてこんな所へ来たのだろう。

思い出そうと、少し視線を下へと下げる。

その時だ。

キラリとした何かが、私の死体のそばに落ちているのが目に入った。

ゆっくりと近づき、それを拾い上げる。

ペンダントだった。

小さな白いガラス玉がハートの形にいくつもちりばめられており、かすかな月明かりを受け、それらが乱れた光を映し出す。

これは、今日まで付き合っていた先輩に貰ったものである。

ああ。

思い出した。

私は今日、彼にふられたのだ。

他に好きな子ができたから、と。

私はその後どうしても一人になりたかったので、ふらふらと学校の近くにあるこの山の中へと入ったのだ。

運が悪かったなあと思いながら、そのペンダントをまた地面の上に置く。

そして、はっと気が付いた。

私は今、物に触れることができたのだ。

さらに、私には影があった。

ぼんやりと、私の足のところに暗いものがくっついていてる。

なるほど、と思う。

死んだ、ということ以外では、生前とほとんど変わりはないようだ。

そういえば確か、ある本にこう書いてあるのを読んだことがある。

『己の亡骸が発見されるまでは、魂はあの世へ行くことができない。』

『

ということは、すぐ目の前に転がっている『私』が見つかるまでは、ずっとこのままでいられるのだ。

ならば、隠せばいい。

私は、本当の『私』の腕を掴んだ。

いや、掴もうとした。

しかし、どういうわけか、触れることができないのだ。

私が透けているのではない。

本当の『私』が透けているのだ。

白い壁に映し出されたスライドを掴もうとしているように、スカリスカリと通り抜けてしまうのである。

幸い、ここは山の中なので人通りはほとんどないが、やはり隠せないとなると見つかるのは時間の問題だろう。

さあ、消える前に何をしよう。

貯めてきたお小遣いを全て使って、行った事もないような高級レストランで食事でもするか。

それもいいかもしれない。

でも、何か違う気がする。

本当に、最期にすべきこと。

ぱっと、母の顔が頭に浮かぶ。

母に、会いたい。

私はくるりと向きを変え、家へ向かって走り出した。

中

中・

私の住んでいた家は、決して綺麗とは言えない。

古くて小さい、母の実家である。

祖父も祖母も、私が高校に入る前に亡くなっており、母と私の二人だけで住んでいた。

父と母は三年前に離婚した。

父が赴任先で女を作ったのだ。

それから母は小さな印刷会社に勤め、私を高校に通わせるために、一生懸命働いてくれていた。

ガラリと古い引き戸を開ける。

それに嵌め込まれた曇りガラスが、うるさく音をたてる。

その瞬間に、ふわりと、お味噌汁のいい匂いが私を出迎えてくれた。

居間へ行くと、母がテーブルの上に料理を並べていた。

「ただいま。」

と言うと、母は顔をこちらへ向けた。

「おかえりなさい。ごめんなさい、全然気が付かなかったわ。変ねえ、どうしてかしら。」

首を傾げる母を見て、少し淋しくなる。

たぶんそれは、私が死んでいるからだろう。

「もうご飯だから、早く着替えてらっしゃい。」

「はあい。」

私はいつものように面倒臭そうに返事をして、トントんと二階へと上がる。

自分の部屋に入ったとき、全てがとても愛しく思えた。

使い古した勉強机も、いつも寝ている水色のベッドも、幼い頃から部屋にあるベビー箆笥も。

服を着替えて、制服をハンガーに掛ける。

なんだか、彼らにお礼がしたいと思った。

感謝を込めて、何かを捧げたいと思った。

そうだ！

私はゆっくりと歩いて行ってピアノの前に立つ。

蓋を開ける。

少し黄ばんだ鍵盤が顔を出す。

私はそっと指を置き、弾き始めた。

シヨパンの『別れの曲』。

私はこの曲がとても好きだ。

哀愁の中の美しさと激しさが、交互に胸の奥を打つ。

途中母が、「今何時だと思ってるの!」と怒るのが聞こえたけれど、止めなかった。

今ここで止めたら、きっと後悔する。

私は心を込めて、鍵盤を叩き続けた。

終わったとき、少し息が弾んでいた。

呼吸を整えるため、深呼吸を三回。

冷たい空気が心地良い。

部屋の中を、一周ぐるりと見渡す。

そして、しっかりと頭を下げた。

今日まで本当にありがとう、と。

下

下・

居間へ戻り、母と夕食を食べた。

献立は、肉じゃがとお味噌汁とご飯という、よくあるものだった。

でも、それで良かったと思う。

きっとこれが、私にとって最後の夕食になるだろう。

それが母の手料理で、本当によかった。

肉じゃがのジャガイモを一口食べる。

それからまた一口と、箸をすすめていく。

しっかりと味を噛み締めながら。

ちゃんと『母の味』というものを味わったのは、たぶんこれが初めてだと思う。

「おいしい。お母さん、すごくおいしいよ。」

「あら、そう？いつもと変わらないわよ。」

母は嬉しそうに目を細めた。

私は、母のこの顔が一番好きだ。

「ねえ、お母さん。私、明日の晩カレーが食べたいな。」

「カレーね。わかったわ。材料を買っておかなくちゃね。」

「うん。楽しみにしてる。」

私は笑った。

楽しそうに。

淋しそうに。

私は笑った。

今まで気が付かなかったけれど、きっとこれが『幸せ』なのだろう。

大好きな人と一緒に笑って、一緒にいる。

私は、気付くのが遅すぎた。

沢山の幸せを、素通りしてしまったのだ。

幸せすぎて、幸せではなくなってしまったのかも知れない。

もっと早くに気が付いていればよかった。

私は、とても幸せだったのだと。

その後、私は母の肩を揉んだ。

毎日働いている母の肩は、とても硬かった。

「お母さん、毎日お疲れ様。」

「なあに、改まって。」

母は気持ち良さそうに目を閉じ、クスリと笑った。

「気持ち良い？」

「うん。すごく気持ち良い。」

「よかった。」

私は嬉しくなって、指にもう少しだけ力を入れた。時計の音だけが静かに響いている。

「お母さん。お母さんはお父さんと別れて、色々大変だったと思う。それでも、私のことを一生懸命育ててくれた。高校にだって通わせてくれた。すごく感謝してる。ありがとう。本当にありがとう。私、お母さんの子供でよかった。」

「何よ、気色悪い。今日の春香、熱でもあるんじゃない？」

母は恥ずかしそうに下を向いた。

なんだか私も少しだけ恥ずかしくなったけれど、言えて良かったと思う。

その時だ。

突然電話が鳴り出した。

私はあっと思った。

時計を見る。

九時十分。

あれからまだ、三時間しか経っていないではないか。

母が、よいしょと立ち上がる。

待つて！

私はまだ一番大切なことを言っていない！

廊下へと消えていく背中に、お母さんと叫ぼうとしたが、声が出ない。

ああ。

どうしよう。

ぱつと後ろを振り向いたとき、机の上に、短い鉛筆と、小さな紙切れが一枚置いてあるのが目に入った。

私は急いで鉛筆を手を取った。

最後の一文字を書き終えた途端、手に力が入らなくなり、鉛筆がポロリと机の上に落ちる。

間に合ってよかった。

手を見ると、指先がほとんど消えていた。

涙が溢れる。

消えてしまふのが怖いのではない。

母に会えなくなるのが、とても淋しいのだ。

お母さんと、離れたくないよ。

涙が頬を伝っては落ちる。

その度に、どんどんと私の姿が薄れていく。

ああ、さようなら。

どうか私のことを、忘れないでください。

静かに目を閉じる。

そこには、いつもの優しい母の笑顔があった。

春香の母、優子は、電話の内容を信じられずにいた。

娘が死んでいるというのだ。

そんな馬鹿な。

ついさっきまで一緒にいたではないか。

優子は、娘を呼んでくるからと、いったん受話器を置いた。

娘の名を呼びながら、居間へと行く。

返事がない。

姿もない。

段々と心臓の音が早くなる。

どくりどくりと。

「春香！春香！」

家中を探し回ったが、どこにも娘の姿はない。

気が付くと、居間へと戻ってきていた。

泣くまいと目線を下へと下げると、床に一枚の小さな紙切れが落ちていた。

拾い、表を見る。

そこに記されたメッセージを目にした途端、一気に目の前が揺らいだ。

涙が紙へと落ち、文字をにじませていく。

『お母さん、大好きだよ』という短い言葉は、とうとう最後には読めなくなってしまった。

おわり

下（後書き）

どうも、木村よしです。

『三時間』を読んでくださり、ありがとうございます

批評や感想、駄目だしなど、何でもいいので書き込んでいただけると、これからのよしの力になるので、よろしく願いします!!

この作品は、私が高1の時に書いた作品で、初めての小説でもあります。

だから文章めっちゃめっちゃですが汗。

コンクールに出したのですが、するっと綺麗に落選しました笑。

でも、自分では結構気に入っている作品だったりします。

この作品を読んで、何かを感じていただけたなら、木村よしは本当に幸せです。

いつも感謝することを忘れてしまう私ですが、母にこれを捧げたいと思います。

いつもありがと、お母さん。

これからも、木村よしと、よしの作品たちを、暖かくみまもってやってください。

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5005d/>

三時間

2010年10月10日22時42分発行